小田原俳句協会報

理事会だより（５・８）

一、協会報七百号記念令和7年小田原秋季俳句大会の実施内容につき長谷川副会長からの実施提案につき審議し決定した。①兼題「秋の空」「木犀」②投句締切８月１日（金）投句先：須田聡子 ③第一部の賞を三十位に拡大、第二部は全員表彰 ④選者特選賞：佃名誉会長、大石顧問、村場会長、グループ（零、春野、みなみ）⑤特別選者特選賞（各地俳句協会代表者）：神奈川現代俳句協会（尾崎名誉会長、芳賀会長）、中井俳句協会長谷川会長、茅ヶ崎俳句連盟清水会長、平塚俳句協会石黒会長、秦野俳句協会竹村会長 ⑥小野理事の提案により各地俳句協会への働きかけを各俳句大会等の機会に行う。

二、総会議案の６年度事業報告に77回桜まつり俳句大会実施を協会報５月号で追加した旨報告。（事業部）

三、新会員：神田征夫さん（沈丁）会員総数は百四十一名に。

「俳句おだわら」10句抄（693号より）

石井きよ子　抄出

小流れに舞ひたる梅花二・三片　山﨑　悦子
縁側の温もり集め桜餅　髙井　幸子
蛇穴をいでて前世を探るかに　尾﨑　一夫
地中から内緒話の春の音　市川めぐみ
啓蟄の派出所日誌「ノラ一匹」　伊藤　道郎
ぽつねんと関守石や散椿　庄司　下載
俎板に葱の白さや冴返る　澁谷　明子
シーソーが黙って見つむ春の雪　佃　悦夫
パイプ椅子残る寒さの会議室　山田　照子
閉館の蔵書は眠る涅槃西風　須田　聡子

瀬戸　悠　抄出

祭神は橘媛よ春淡し　川本　育子
子の顔にどこか似てゐる紙ひひな　肥後ちさこ
陽炎や神代の恋はおほらかに　森田　久江
ウクレレのドレミ縺れて春の宵　鈴木　陽子
デカンターの底の濁りや二月尽　内田知江子
春の風リタルダンドに歩む径　廣田　悦子
ぽつねんと関守石や散椿　庄司　下載
余生まだ今が青春山笑う　中村　昌男
きさらぎや哲学的餡パンの季節　大石　雄介
指切拳万赤鉛筆は折れやすい　小島ノブヨシ

令和６年度事業報告

〈主催及び主管事業〉

１）第 77 回小田原桜まつり俳句大会　場所　おだわら市民交流センター（UMECO）
４月７㈰　今回をもって終了
第一部（兼題の部）「桜又は花」「蝶」　投句者163 名　569 句
第二部　春季雑詠２句　　参加者 67 名　132 句

２）令和６年度小田原秋季俳句大会　場所　おだわら市民交流センター（ＵＭＥＣＯ）
10 月６日（日）　11 時より受付 12 時半開会　整理費 500 円
第一部（兼題の部）作品募集　兼題「案山子」「柿」　投句者162名　206組　512句
第二部　秋季雑詠２句　総互選　参加者 54 名　小田原市から安藤副市長、大川市議会議長を来賓にお迎えして祝辞を頂く。恒例の寿齢者対象者に記念品（クオカード）を贈呈した。　22 名

３）秋の吟行会　吟行地　国府津海岸周辺　11 月７日（木）　担当 : 事業部
当日嘱目３句、参加者 24 名。参加者の自己紹介後総互選、披講は各自で実施した。

４）立春青空句会　令和７年２月４日（月）、場所　小田原城址公園　天守閣広場
小田原観光協会夏刈事務局長並びに当協会の村場会長の挨拶等、セレモニーの後、協会員による短冊吊るし作業に移る。本丸茶屋で会食後、当日嘱目 2 句、予め投句した１句の計３句にて総互選、５句選で　披講は各自、22 名にて句会を実施した。

５）第 61 回小田原梅まつり俳句大会　場所　おだわら市民交流センター（ＵＭＥＣＯ）
２月９日（日）　11 時より受付 12 時半開会　整理費 500 円
第一部（兼題の部）作品募集、兼題「梅」「余寒」投句者 155 名 244 組　488 句
第二部　春季雑詠１句と当日発表の「雲雀」２句にて総互選４句、出席者 63 名
結社賞 13 を含めて 50 位までを表彰

後援事業

第 46 回笛まつり俳句大会（南足柄女性センター）みなみ俳句協会　９月 29 日㈰
整理費 500 円
第一部（兼題の部）作品募集　兼題 ①「笛」又は「蜩」　②「水澄む」
第二部当日出題、秋季雑詠と２句　総互選

第 14 回おおいゆめの里俳句大会 (大井町立そうわ会館) おほゐ俳句協会
令和７年３月８日㈯、
第一部（兼題の部）作品募集　兼題「朧」「菫」　第二部 当日席題「桜」と春季雑詠、２句総互選

その他の事業

合同句集 13 集の発行（６年 12 月）

令和７年度事業計画

〈主催及び主管事業〉

１）秋の吟行会　場所・日時未定　　担当　総務部

２）令和７年度小田原秋季俳句大会＆協会報700号記念大会（仮称）
場所　おだわら市民交流センター (UMECO)
日時　10 月 11 日㈯　時間等内容未定

３）令和８年２月４日㈬　立春句会　場所　小田原城址公園　天守閣広場

４）令和８年２月８日㈰　第 62 回小田原梅まつり俳句大会

後援事業

第 15 回おおいゆめの里俳句大会　おほゐ俳句協会　３月14日㈯　大井町立そうわ会館

俳句おだわら（4・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（3・21）　久江報

風が描く画布青空の桜かな　足立　和子
下校児の土筆三本家苞に　川本　育子
桃の花風の奏でるわらべ唄　高橋　小糸
風の音風に揺れたる土筆かな　湯浅　義幸
梅散るは刻のひらひら舞ふごとし　近藤　久江

◆山北（3・27）　由里子報

新聞の匂ひを開く春の雨　和田恵美子
糸遊や有象無象の立ちのぼる　星　一義
「無」の多い般若心経つくしんぼ　石田加津子
添削の朱筆麗はし蕗の薹　竹下由里子

◆春野（3・16）　きよ志報

散りいそぐ桜遅れる市営バス　伊藤はる子
耳裏にざわめきのある花疲れ　内田知江子
鳥帰る誰のものでもない地球　尾崎　一夫
桜咲きこの世に居ない人ばかり　瀬戸　悠
風光る使はぬ畑に住まぬ家に　二見　和江
浅春のテキストの山語学馬鹿　ミステゥレッタ弘美
うららかや陽を浴び風浴び羽音浴び　長谷川きよ志

◆沈丁（4・3）　寶子山報

春眠や携帯アラーム止めてまま　若村　京子
陽春や家族総出の田畑墾（はな）る　柳澤ミサ子
春眠の園児たてよこななめなり　田中　惠一
春眠や吸いこまれそうなアメジスト　河本　純子
花疲れ小田原城が遠く見え　勝木　澄子
春眠やかすかに重き泥パック　菅野　英余
げんげ田や任地へ続く一本道　高井　幸子
花を来て芝居の中の花吹雪　片野　節子
桜まじ茶毘の煙は空に吸われ　峯尾ユキエ
春眠やピューとケトルに起されし　清水美代子
田の脇に大根の花咲き誇る　松下　俊之
フェフェハケと笑ふ女将や花見宿　武居裕美子
花は五分人の歩幅のゆるやかに　森田　久江
春眠のよだれ光りて二度寝かな　川瀬　芳子
廃屋の窓の花瓶に花落ちる　鈴木　陽子
終活の隙（ひま）の春眠ながながと　寶子山京子

◆青梅（4・9）　幸子報

燕舞ふ土手を散歩の二人づれ　大塚　行人
お囃（はやし）の近づいて来る里の春　加藤まり子
春うらら急ぐことなき畑仕事　久保寺トミ子

しっぽりと濡れ三寸の甘茶仏　田中　幸子

◆みなみ（3・15）　かほる報

雲雀野の明るき風と四方の山　加藤　富江
人間に聞かす囀り揚げ雲雀　川上　靖子
青き踏む携帯電話オフにして　加藤　健治
平凡に暮し花種蒔いている　市川めぐみ
「どちらまで」小粋な老いの春ショール　豊田　幸枝
一駅を線路に沿うて青き踏む　斉藤　静
春の野辺田舎の良さに浸りけり　小瀬村信子
青き踏む左右の手には子等の手が　柳川　紀枝
啓蟄や大地は呼吸整える　加藤かほる

◆おほゐ（4・9）　きよ子報

ちちははの好みし物に花菜漬　松良　榮美
正面の箱根の山や花曇　安池　利枝
桜舞う麻痺のある子の一歩かな　二上　光子
雁風呂や北へ標の竜飛崎　横塚　昌平
菜の花の風が誘いしウォーキング　石井千代子
春の雷分解写真となる大地　小野　菊土
語り継ぐ七つボタンや桜散る　香川　花子
素になれるときを求めて花の下　加藤　春江
幸せの笑顔届けし花菜風　瀬戸とみ子
銀輪を連ねる土手や花菜風　髙橋みどり
老境のくらしのリズム茎立菜　中根登美子
菜の丘を少女が駆けて花になる　中村　昌男
涙無くグータッチして卒業す　中津川晴江
桜散る吾の掌に確と生命線　廣田　悦子
ヒヤシンス主なき部屋へ光置く　原　仁子
百千鳥清しき朝始まりぬ　石井きよ子

◆こよろぎ（3・14）　つとむ報

濡れ縁に友のおもたせ桜餅　大澤　紀子
干し物のみなちぎれさう春一番　髙杉掘三朗
千本の花のかなたに蔵王堂　植松テル子
黒牛のまなこに映える斑雪（はだれ）　神山つとむ

◆香雨・梅ごち（3・23）　忠山報

囀や卓に揃ひのマグカップ　肥後ちさこ
飼犬に「待て」を教へる日永かな　関戸わよこ
芽吹きたるひとつひとつに日の宿り　門松　鳳文
隅にまで園に日あたる初桜　吉田　百代
さへづりに気づかれぬやう窓を開け　吉田　康雄
小流れのさざれ石へと春日影　陌間みどり
いつせいに日ざし取り込み花こぶし　小澤　純子
鳩と化す鷹の一羽は狩行とも　池田　忠山

◆鷹（4・7）　十五報

紅梅の垂れて小さき庭たのし　青木　孝子

夫の歩の日に異によろし木の芽張る　池田　令子
病む人の口述筆記花明かり　西賀　久實
地方紙を敷いて文旦送りきし　佐宗　欣二
本堂へ続く回廊牡丹の芽　中田　笑子
水底のきらめく波紋芹を摘む　山﨑美知子
春休借りしノートの文字まろし　石川　州洋
人文字に村人も出て卒業す　庄司　下載
辻占の老の眼光街朧　瀬戸　りん
まどかなる楠の樹影や卒業す　高橋久美子
朝虹や鳥語あつまる雑木山　中山智津子
芸大の上野キャンパス囀れり　齊藤　桂
白木蓮に雲切れのなき夕べかな　芹澤　常子
蕗味噌や晩酌の父無言なり　松岡美和子
たんぽぽの絮や飛び立つ軍用機　深澤　一華
啓蟄や平飼ひ鶏の利き蹴爪　大島美恵子
せせらぎの底に照る石芹洗ふ　加藤　幾代
東屋に弁当拡ぐ土筆かな　高橋千代子
啓蟄や球音高き草野球　米山　翠
天守より見下ろす町や養花天　來田　新子
遠足やグリコのおまけ見せ合うて　青山　典仁
林から鳥声しきり夏隣　大沢　年子
若草や墓石に知れる祖先の名　小林　環

東屋に水音さやか花馬酔木　澁谷　明子
予定表書いて眺むる日永かな　下平　美子
亀鳴くや曽我の誉と言ふ地酒　鳥海　壮六
息一つ足して稿書く日永かな　古屋　德男
介護する我も足弱春あられ　守屋　まち
虻飛んで空の青さに消えにけり　村場　十五

◆実のり（4・16）

全山の桜吹雪や迷ひ路　たか志報
丁寧にもやしの根とる春炬燵　荒井ちゑ子
校庭の砂塵巻き上げ春疾風（はやて）　岩本ひさみ
風船を飛ばして未来広げたる　杉本　久子
売却の決まる田畑や草若葉　木村　幸枝
　　新井たか志

◆零（4・17）

生き様は一心不乱チューリップ　史郎報
表札に仔猫の名前風ひかる　青木たけを
風光り我が心をも澄み渡る　伊藤　道郎
みつを展納得させられ風光る　川合　昌子
花あんず産衣の吾子のやわらかし　佐藤　正子
いぶりがっこ老婦の手皺歴史あり　中村　裕子
前へ前へ先へ先へと春がくる　のがわきいち
風光る死ぬまで生きる被曝牛　本多登美子
　　岡本　史郎

◆草むら（4・20）

重満報

春鱚釣引きずる糸に魚信聴く　石井　秀稀
土下座して蟻と語らん絶景　佃　悦夫
連翹や宿す枝先の磁力線　佐々木重満

◆無所属

老幹を折りふすお濠桜雨　小林永以子
春眠の深き水底より戻る　畠　梅乃
北窓開く羽目をはづせり大統領　北村　文江
草青むよいしょと鴨の上る土手　一ノ瀬茂代
プレハブの校舎の三年卒業す　出澤　洋子
丹沢の牛の乳垂れ春来たり　岩楯惠津子
世を隈無く愛す陽光チューリップ　大佐田うづき
婆ひとり座して朧の中にゐる　山田　照子
八重桜宙が重いと思いたり　田畑ヒロ子
大切に空をいただく白木蓮　小澤　園子
櫟山えくぼのやうに巣箱かな　須田　聡子
三椏の花や有言不実行　瀬戸　正洋
三の丸行きて葉桜静かなる　山本　すみ
きーこきーこにゃあにゃあ自転車が二台　大石　雄介
底ぬけの津軽三味線空芯菜　大石　和子
花便りナビに逆らう裏通り　岡田　典代
豆苗のレシピあれこれシャボン玉　杉山あけみ
蝌蚪の水澱み骨肉相食めり　小島ノブヨシ
紫木蓮べたべた散って靴汚す　杉崎　せつ

俳句おだわら鑑賞（令和7年3月号）

青山典仁

逃水を追うてネバダの砂漠にゐ　杉崎せつ

ネバダ砂漠には米国の核実験場がある。そこでは一九五一年から千回近い核実験が行われた。それに対し、核実験中止や平和を求めた抗議運動も何度も行われている。ヒバクシャの多くは「水」を求めながら亡くなられた…戦争無き世界は、追い求めても得られない「逃げ水」のようなものなのだろうか。

ネバダ砂漠には「エリア51」というＵＦＯの聖地もある。地球の歴史と現状を異星人たちはどう見ているのだろうか。

小澤園子

蝌蚪生れ、ぼ、ぼ、僕らは少年探偵団　小島ノブヨシ

蝌蚪とは古体篆字の称から由来する。中国の上古に、竹簡に漆汁をつけ文字を書き、竹は硬く漆は粘っていておたまじゃくしの形に似ていたからである。オタマジャクシを最近見かけなくなった。中七以下はテレビドラマの主題歌で、懐かしい。オタマジャクシと少年とは同意語。今の子供はスマホゲームの時代、探偵ごっこしない。この殺伐とした世の中でホッとする一句である。

加藤健治句集

「足柄路」

加藤かほる（協力豊田幸枝）

この度みなみ俳句協会の加藤健治氏が自分史ともいえる句集「足柄路」を刊行された。氏は長年中学、高校の数学教師として教鞭をとり、更に校長として勤め上げ、その後は南足柄市の教育長を歴任された。

氏の俳句は、教職退職後から始め熱心な勉強を経て今までの経験、更に新しい環境又暮しの中から数えきれないほどの句を詠まれた。

この句集を編む背景には教え子たちの強い勧めがあったという事で、教育と俳句を両立して質朴に生きてこられたしっかりとした足跡のある句集として仕上がっている。正に一生一代記と言える句集なのである。

句集のそれぞれの分野の中から主な句を抜粋。

清雲賞　校長の颯と水打つ参観日

玄雲賞　対峙せる富士と箱根や霧襖

これは所属している結社「玄鳥」時代の入賞句である。校長時代の心配り、自宅から見える風景の描写が詠まれている。

次に四季に区割された章からの主な句を抜粋。

新年　左義長の炎太鼓に囃さるる

春　鳥雲にあす退職の椅子を拭く

余生なおたしなむ詩吟梅白し

梅咲いて村ぢゆうの木が落ちつかず

夏　略図手に家庭訪問町薄暑

疎開児は八十路越えたか新茶汲む

麦秋や書架に手垢の数学書

秋　寸劇の始まりそうな案山子かな

尊徳の捨て苗想ひ豊の秋

星祭子らに教へるピタゴラス

冬　肩書をはずす安らぎ青木の実

ちゃんちゃんこ力むことなき身となりて

いそいそと鍬担ぎ出す畑小春

この句集は四百句余りの俳句とエッセイ等で構成され、教師時代と退職後の暮しの中から生まれた句が満載。どの句を見ても平明でありながら言葉を吟味、推敲を重ね格調高い句に仕上げている。日記を読んでいるような、親しみやすい佳句ばかりで氏のいわば集大成の句集。

氏は今年米寿、みなみ俳句では指導的立場でいつでも前向きであり努力家。また、人柄も良く人の輪を大切にする温厚な方である。氏にはいつまでも感性豊かな俳句を詠み続け私達後進の鑑でいて欲しいと願っている。

城苑俳句・夏の部

（合同句集第十三集60～74頁より近藤久江抄出）

向日葵の中に星屑吸ひ込まる　田中　惠一
忘るるは神の計ひ水中花　田中　幸子
夏痩せなどしてはおれない句は未完　田畑ヒロ子
さざえ売り潮の香りも売りにけり　故　田渕　令子
蛍ども放火三昧みたいだなあ　佃　悦夫
緑裂き洒水の滝の一直線　出澤　洋子
点となり線となりゆく螢の火　豊田　幸枝
駅近き朝の地下街実梅出づ　鳥海　壮六
飛び習ふ子燕の群れ夕河原　中田　笑子
危険です地球沸騰の暑さかな　中津川晴江
滝音を胸しとるまで聞きにけり　中根　和子
少年の夢押し上げて柿若葉　中根登美子
カーテンの中の孤独や青嵐　故中野　文子
あめんぼうワルツで進むズンタッタ　中村　裕子
夕立や灼熱の地が息をする　中村　昌男
浜木綿の直立沖に朝来たり　中山智津子
暑さに負けるな山盛野菜食卓に　野川木一路
サングラス己の中の別の人　陌間みどり
昭和・平成遊び尽くしてみどりの日　長谷川きよ志
拾ひたる時計動いてゐる夏野　畠　梅乃
水田を飛び立つ影や夏の鳥　原　仁子
髪洗ふ明日は良き日になりさうな　肥後ちさこ
生き方は引き算もよし風光る　廣田　悦子
地球儀に航路をたどり夏惜しむ　深澤　一華
夕焼の町の片隅道祖神　二上　光子
ホームラン星が涼しくありにけり　二見　和江
薫風や足でこそげる鍬の土　古屋　德男
草といふ字を書いてゐる草いきれ　寶子山京子
五月雨や飲み干してしまいたい嘘　穂坂志げる
古書店のガラスの引き戸夏椿　星　一義

●理事の異動：中田笑子（事業部から広報部へ）
高井幸子（一般理事から広報部へ）
秋山　昇・西賀久實（一般理事退任）

◆新会員：湯浅義幸（鹿火屋）大澤紀子（こよろぎ）
本多登美子（零）石川州洋・松岡美和子（鷹）森田
久江・川瀬芳子・鈴木陽子（沈丁）ミステゥレッタ
弘美（春野）川上靖子（みなみ）
（10名、6年度中入会も含みます）

◆退会：湯本とし子、吉井源太郎、山﨑悦子、青山典子、
板谷雅泉、大木敬子、柏木良花、須田晴美、田下昌人、
中根和子、百川秀子、瀧本敦子、秋山昇、尾崎幸子、
神野美代子、柴田礼子、穂坂志げる、蓑宮わか（18名）